

## 長期政権の 崩壊と混乱

2024年8月5日の午前中、バングラデシュ駐在スタッフから届いたメールには次のような報告がありました。

「反差別学生運動が呼びかけたダッカでの行進による混乱で100名以上が死亡。政府は昨日、午後6時から首都と国内の一部地域に無期限の夜間外出禁止令を発令。オイスカ研修センター近くでも同様の衝突があり、縫製工場への放火やセンター前の道路および近隣のOB所有の建物などが壊されたとの報告がありました(当時、帰国していた駐在スタッフは、現地からメールで連絡を受けた)。

同日夜の続報には「OBの話によると、30分ほど前にシエイク・ハシナ首相は軍隊のヘリで国外に逃げたとのことです」とあり、その後、日本でもハシナ首相の退陣、暫定政権発足などが報道されました。

さらに2日後のメールでは、「無政府状態となり、押さえつけられていた不満が各所で噴出。この機に乗じて問題を

## TOPIC

# 巨大煙突の下に暮らす人々 バングラデシュ・マングローブプロジェクトの現場から

最貧国の一つに数えられるバングラデシュでは、洪水やサイクロンなどの自然災害にたびたび見舞われ、政治的混乱も続く中、多くの人々が厳しい生活を強いられています。オイスカがマングローブ植林プロジェクトを進める地域では、国の発展の礎となる港湾や発電所などのインフラ整備が急速に進む様子が見られます。マングローブ植林プロジェクトの今と、海岸に暮らす人々の様子をお伝えします。

(海外事業部 林久美子)



🌳 オイスカのマングローブ植林プロジェクト

漁を終え、村に戻る男たち。村の集落は、防風林となっているモクマオウの森の向こうにあり、その森の先にマタバリ超々臨界圧火力発電所の煙突が見えてくる



上／駅の自動改札は日本のそれとほぼ同じ。駅には日本の支援であることを示したプレートが掲げられている

右／未舗装である以外にも、雨季は街なかの道路が常に冠水してしまうといった課題もある



起こす輩が出ております」との前置きの後、センターの壁を壊して侵入した者がいること、また、暴動で警官・警察署も襲われている状況で、届け出をしても何かしらの対応も望めないとの報告がなされました。

約15年にわたる長期政権が崩れたことによる政治的な混乱が続く、オイスカの活動もその影響を受けています。農場運営は継続しているものの、研修事業は休止しています。

## 発展するダッカ

オイスカの研修センターは、バングラデシュの玄関口、ハズラット・シャージャラル国際空港から北西に約25kmのダッカ郊外に位置しています。

周辺には衣料品や靴などの縫製工場が多く、そこで働く女性たちの住宅もひしめき合うように立ち並ぶエリアです。

現地を訪問したのは雨季が始まった6月下旬。未舗装の道路はぬかるんだり、水がたまっていたりしているのに、庶民の足「リキシャ」はおかまいなしに行き交い、バイクや自動車などの乗り物も泥を跳ねながら無秩序に走行。沿道には、リヤカーなどに積ん



訪日研修生OBのマニック氏がマングローブ植林プロジェクトのコーディネーターを務めている。過去の植林サイトの植林年、日本から来たボランティアグループの名前がすべて頭に入っている

だ野菜や果物を販売する人たちも多く見られ、活気が感じられます。

この郊外から中心地に向かう未舗装の道路では、現在、中国資本で高架の高速道路建設が進められているほか、日本の支援で完成したメトロがダッカ市内を走っており、物流・輸送の質の向上や渋滞緩和といった課題の解決が期待されています。

ダッカ市とその周辺を含めたダッカ都市圏は、2400万もの人口を抱えながら発展を続けていますが、他の大都市同様、労働力や食料、電力などのエネルギーは、地方から供給されているという構図が顕著となっています。

## コックスバザールでの取り組み

オイスカが1992年からマングローブ植林をスタートさせた南東部に位置するコックスバザール県は、国内有数の観光地であると同時に、ロヒンギャ問題でも国際社会から注目を集めており、日本での報道でその名前を耳にしたことがある方も多いのではないだろうか。同地にはミヤ



ンマーから国境を超えて逃れてくるロヒンギャ難民を受け入れるキャンプがあり、人道支援を行う国連機関や国際NGOの事務所も多く存在します。

近年オイスカでは、同県のモヘシュカリ郡のマタバリ地区やドルガタ地区の沿岸部でマングローブ、また内陸の砂浜には海岸林樹種であるモクマオウを植えています。

マタバリ地区のシャッパラ村は海岸浸食が深刻で、21年



1／2021年に植えたモクマオウが育ち、防風林になりつつある

2／視察をすると、こうした盗伐の跡が見られる

3／泥に足を取られながらの植林



大きく育ったマングローブ林の向こうにも煙突が見える

から林業局のプロジェクトを引き継いで、モクマオウを植林。当初は林業局から苗木を購入していましたが、昨年度からは住民の雇用機会を拡大し、当事者意識を育むため、住民に育苗を任せることに。植林グループを指導するバッシャン氏は「初めての経験で手探りではあったが、いい苗を育てることができた」と話しつつも、さらによい苗を育てたいと、さまざまな質問をしてくる姿に意欲が感じられました。

また、植林地に隣接した場所に育苗場を設置したため、これまでのような運搬の労力が必要なくなったこともプラス面として報告されました。ただ、課題として住民への浸透の難しさを挙げており、ヤギや牛に与える草が取れない



植林グループのバッシャン氏。集落につながるこの道はかつて大雨が降ると冠水していたが、国連国際移住機関による支援で昨年修繕された

## 煙突のある風景

植林地の村々での生活は、漁に出るほかに、海に面し

季節には枝葉が切られ、家畜のエサとして持ち去られる事業も少なくないと話します。ドルガタ地区のマングローブ植林地でも、住民が漁に使う網が苗木を傷つけたり、引き抜いてしまったりする被害が多く見られるとのこと。また、モクマオウ同様に家畜のエサとして枝葉を切ったり、養殖池などの資材として幹の部分を持ち去ったりする住民も確認されており、取り締まりに苦慮している様子がうかがえます。

## マタバリ周辺の村の様子



養殖用のエビの稚魚を販売



高さ275mの煙突はマタバリのランドマーク！

ゲート付近で写真撮影に興じる若者の姿もよく見られる



村に帰り着いた船が、市場に出した後の稚魚を海岸に捨て、村人たちがそれを拾いに来る。3人は表紙写真の少年たち



塩の出荷の様子



この道具を使ってカニをつかまえます！

カニのはさみと足を器用に紐で縛り、袋に入れ売り歩いていた



学校帰りの子どもたち。カバンがなく、手で教科書を持ち帰る少年の姿も

## オイスカのあゆみ in バングラデシュ

### 1964年 東パキスタン総局発会

1962年からの調査団派遣を経て総局を立ち上げる。チッタゴンにモデル農場をつくり、日本からの指導員が稲作、野菜と果樹の栽培などを指導。

### 1970年 災害救援調査団を派遣、以降救援活動を行う

11月12日に20世紀最大といわれたサイクロンが発生し、チッタゴンをはじめとする各地で救援活動を行うべく、被害状況を調査。物資支援などを実施しながら長期復興支援を視野に活動を開始した。一方、日本では全国支部で街頭募金を行い、延べ3,500名で約1,544万円を集めた。



### 1971年 東パキスタンが「バングラデシュ」としてパキスタンから独立

### 1974年 農業研修生の受け入れスタート

1970年に窯業を学ぶ研修生を受け入れたものの、農業研修生の受け入れはこの年から。

### 1981年 ダッカに研修センター開設

11月28日、建設に協力した愛知県支部の会員ら54名をはじめ日本からも大勢が開所式に参加。政府代表、訪日研修生OBのほか地元住民らも集い、1,000名ほどの盛大な式典となった。



### 1984年 第9回アジア太平洋青年フォーラムを開催

日本、オーストラリア、インド、タイなどから180名の青年代表らが集まり、政府や民間セクターと連携して各国の植林活動を拡大し、若者の参加を促すための話し合いなどを行った。

### 1985年 女性の研修コースがスタート

イスラム教徒が多く、研修センターで男女が一緒に学ぶことが許されなかったため、男性のみの研修コースだったが、日本政府の支援を得て女性のための研修センターを建設。



### 1992年 「子供の森」計画開始

#### マングローブ植林プロジェクト開始

フィリピンで1991年から始まった「子供の森」計画が、バングラデシュでもスタート。マングローブ植林プロジェクトには多くの日本人ボランティアも足を運び、地域住民と共に植林に参加した。



た場所に養殖池や塩田をつくらせて生活の糧にするなど、海に依存しています。塩づくりは乾季にのみ行われるため、雨季の初め頃には、村に塩を買い付けに来る大型船が多く見られます。海辺を歩けば、カニをつかまえる親子、網の修繕をする人、養殖用のエビの稚魚を販売する人、漁を終えて岸に戻った船から市場まで魚を担いで歩く人など、海

と共に生きる人々の生活が垣間見えます。そんな地域に、バングラデシュ政府が進める深海港や火力発電所、工業団地建設など、物流やエネルギーを含む総合的なインフラ開発の波が押し寄せています。オイスカの植林プロジェクトのどこからでも見えるマタバリ超々臨界圧石炭火力発電所（以下、発電所）の巨大な

煙突は、その象徴といえるかもしれません。同発電所は日本からの支援で建設され、バングラデシュの深刻な電力不足を補い、経済発展を支える重要なインフラです。プロジェクト視察中には「友人が発電所の取り付け道路の建設で働いていた」といった声を聞いたほか、バッシャン氏は「近くに火力発電所もできたし、経済特区をつくる計画も

ある。若い人が働く場が増えたら近い将来、村は豊かになる」と話しており、雇用機会が少ないこの地で開発が進むことが、雇用の促進につながるの期待の高さがうかがえました。

## これからの取り組み

今後、大きな変化が予想されるマタバリ周辺ですが、ただ経済的な発展を遂げようとも、サイクロンをはじめとする自然災害に脆弱な地域であることに変わりはありません。若手コーディネーターの育成や新たな植林サイトの選定など、取り組むべき課題が山積していますが、災害に強い地域づくりに貢献していきます。今後もこの地でマングローブ植林を進めてまいります。